

令和3年度 学内懸賞論文 A部門

「コロナから得た教訓」

『コロナ後の時代の創造に向けて』

－コロナから得た教訓をどう生かすか－

東北福祉大学 総合福祉学部 福祉行政学科

時田歩菜

1. はじめに
2. 不測の事態と人類の発展
3. 新型コロナウイルス対策という経験から得た学び
4. おわりに

1. はじめに

「新型コロナウイルス」という言葉が日常で飛び交うようになって、2年が経とうとしている。当初は全国における感染者数など、新型コロナウイルスに関する様々な内容がトップニュースで報道されていたものの、今ではだいぶ変わってきている。私の住む山形県においても、昼時のニュースは真っ先に新型コロナウイルスの感染者数を報道していたが、最近では地域の催しがトップニュースにくることもある。

また、オリンピックをきっかけに、スポーツイベントやコンサートなども、有観客での開催が再開しつつある。人の流れも活発になり、山形から東京に向かう新幹線は車両が満席になることもあるという。最初の緊急事態宣言下では、渋谷のスクランブル交差点は数えるほどしか通行人がいなかったにもかかわらず、回数を重ねるごとに人が増え、今年の夏にはひしめき合うほどの通行人がいるのをニュースで目にした。我々は、幸か不幸か新型コロナウイルスに慣れてしまったのだろう。

確かに、ワクチン接種の効果によるものか、日本における感染者数は今のところ落ち着きを見せている。しかし、世界に目を向けてみると、韓国では新型コロナウイルスによる死亡者が最多を更新したり、オミクロン株という変異株が拡大することが恐れられたりしている。

こうした状況を踏まえると、我々が今後も新型コロナウイルスに対応していかなければ

ならないことは明らかだ。では、対応するために必要なことは何か。ひとつの重要なヒントは、新型コロナウイルスを取り巻く情勢等を経験することで得た教訓だと考えられる。なぜなら、人類はこれまでも数多くの不測の事態を経験し、そこから得た教訓を生かして発展してきたと言えるからだ。教訓が今後の我々にどれほど重要な価値や意味を持つか。まずは、その事実を改めて認識することこそが、教訓をより真摯に見つめ思考することに繋がるのではないだろうか。

次項では、歴史における不測の事態とそれに対応した結果、人類がどのように発展してきたかについて見ていくこととする。

2. 不測の事態と人類の発展

そもそも、人類が新型コロナウイルスのように感染症のパンデミック（世界的大流行）を経験するのはこれが初めてではない。十四世紀にヨーロッパで流行したペスト（黒死病）、十五世紀にコロンブスが新大陸に到達したことをきっかけにして起きた感染症、1918年にはスペイン風邪が大流行した。特に、スペイン風邪は「人類史上最悪の感染症ともいわれるだけあって、患者数はWHO（世界保健機関）の推計で世界人口の25～30パーセント、死者数は全世界で約5千万人」¹とされている。当時の世界人口を約18億人²とすると、患者数は約5億人ということになる。これは、感染者約2億7千万人、死者数約530万人（2021年12月12日17時時点）³である新型コロナウイルスと比較しても凄まじい感染症であることが分かる。

こうした歴史上に残るパンデミックを経験した人類がその後どのようになったのか、どのように示されている。

「ペストは結局何を生んだかといえば、ルネサンスを生んだわけです。「メメント・モリ（memento mori'死を忘れるな）」、死のことばかり思っても、いくら敬虔になっても神様は助けてくれない。それだったら「カルペ・デイエム（Carpe diem'その日の花を摘め）」ということで、人間を大事にしよう、と。それがルネサンスを生んだのです。イタリアで生まれたルネサンスは、やがてヨーロッパ中に広がりました。グローバリゼーションが加速されたわけです。」⁴

フランス語で「再生」や「復興」を意味するルネサンスが人類史においてどれだけ大き

¹ 池上彰（2020年）「コロナウイルスの終息とは、撲滅ではなく共存」SBクリエイティブ株式会社、92頁。

² データのじかん「1918年に大流行したスペインかぜが世界に与えた影響とは？」
<https://data.wingarc.com/impact-of-spanish-flu-25690>

³ NHK 特設サイト「新型コロナウイルス」
<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/world-data/>

⁴ 村上陽一郎（2020年）「コロナ後の世界を生きる—私たちの提言」岩波書店、205頁。

な意味を持つかは言うまでもないが、このルネサンスはペストという絶望的なパンデミックを経験した人々、国々によって誕生した。

また、新大陸における感染症の流行は、次のような結果をもたらしたと筆者は述べる。

「でも、これも最終的には、コロニ交換（ヨーロッパとアメリカの間で盛んになった交易）によって、世界的に見ればものすごく大きな犠牲の上にグローバリゼーションが進展して、ジャガイモとかトウモロコシとかサツマイモとか、いろいろな食料が均霑して世界は豊かになったわけです。」⁵

新大陸に生息していたジャガイモやトウモロコシなど、今となっては日常に当たり前で存在している作物は、この時代から旧大陸全土に広まる。保存性に優れ、主食にもなりうるジャガイモや、世界三大穀物の一つと言われるトウモロコシは、世界の食料事情に影響をもたらしたのである。

では、人類史上最悪ともいわれるスペイン風邪はどうだろうか。

「スペイン風邪は何を生んだかといえば、第一次世界大戦を終わらせたわけです。（略）このスペイン風邪で人がバタバタ死んでいくのを見て、戦争なんかしている場合じゃないということになって、何を生んだかといえば、国際連盟を生み、各国は仲良くやっついこうということになったわけです。」⁶

このまま争っているのはパンデミックは永遠に終息しないということ認識し、その学びからすべきことを考えた結果、世界平和の確保と国際協力の促進を目指して国際連盟が生み出されたのである。

さらに、筆者はこう続けている。

「だから、過去三度のパンデミックは全てグローバリゼーションを加速し、国際協調を生み出しているのです。当たり前のことですが、人類は結局、パンデミックを乗り越えて次のステージを切り開いてきたのです。」⁷

こうして見ると、確かにパンデミックを経験した後の世界は、そこから得た教訓をもとに新たなステージに発展していると言える。むしろ、「COVID-19 のパンデミックにおける都市封鎖の時代を経験することで、始まりに戻って、一七世紀以来たどってきたのとは違うもう一つの別の近代を構想する千載一遇のチャンスを手に入れている」⁸という意見を示す専門家までいる。

つまり、新型コロナウイルスを経験した我々が得た学び、教訓は、新しい時代やこれまでになかった新たなグローバリゼーションの創造に繋がる可能性があるということだ。新型コロナウイルスに翻弄されてきた経過や、失敗したとされる政策を嘆くのではなく、我々

⁵ 同上。

⁶ 同上、205～206 頁。

⁷ 同上、206 頁。

⁸ 美馬達哉（2020 年）「感染症社会—アフターコロナの生政治」人文書院、168 頁。

は新型コロナウイルスを経て何を学び、どのような教訓を得たか、それを踏まえて次は何をすべきか、ということについて考える大きな意義がここにある。

次項からは、新型コロナウイルス対策に取り組んだことで得た私の具体的な学びについて述べていく。

3. 新型コロナウイルス対策という経験から得た学び

新型コロナウイルスを踏まえた新たな取り組みを経験することで、私が得たもっとも大きな学びは、IT (Information Technology) の有用性や利便性である。

新型コロナウイルスの拡大により、小学校や中学校は文部科学省の指示で一斉休業となり、大学でもそれぞれの判断で感染拡大の防止策をとることが求められた。我が大学も例外ではなく、数ヶ月の休業を経て、授業が再開された。ただし、それまでと同じように教室に集まって受講するのではなく、オンラインによる遠隔講義での再開である。

それまでの私は、正直なところ IT と呼ばれるような技術・手法を信用しておらず、インターネット通販や Web サイトによる申し込みすらしたことがなかった。そのため、インターネットを使って受講するよう指示があった時は、強い戸惑いと不安を覚えた。また、全国的に見ても、これまでオンラインという手法により通常の講義を実施している事例は少なく、知識や技術もなく要領を得ないまま、手探り状態の中でとりあえず再開されたという印象を受けた。

案の定、当初は上手くいかない点ばかりが目についた。学生からのアクセスが集中することでサーバーが落ちてしまい、時間どおりに受講することができない。ようやく繋がったかと思えば、すでに深夜でまともに受講する体力も気力も残っていないというような状態である。決まった時間割やルーティーンを守って行動することが重要だと考える私にとって、非常に苦痛で苦しい時期だった。

とはいえ、新型コロナウイルスは拡大し続け、これまでどおりの授業が再開されるような見通しは立たない。そこで、私自身の考え方、行動の転換を試みることにした。たとえば、アクセスできない時間帯は避け、その時間に将来の資格取得に向けた勉強をする。毎朝時間割に合わせていた起床時間はそのままに、通学にかかっていた時間を余暇として使う。また、こうした余暇は、外出できないことによる運動不足を解消するため、自宅付近をウォーキングして過ごした。今まで決められたスケジュールで動くばかりだったが、臨機応変に時間を使うことができれば、自ら状況を見て行動や取り組みの幅が広げられることを実感した。

つまり、IT を活用したオンラインによる講義は、直接現地へ行く時間や労力を節約できるだけでなく、多様な学習の在り方や時間の使い方を可能にすることを学んだ。

また、こうした画期的な効果を生み出す IT は、友人とのコミュニケーションにおいても効果的であった。高校時代とは異なり、大学には様々な都道府県に住む友人がいる。ステイホームという感染対策が提案されたこともあり、友人との交流はほとんどなくなって

しまった。そこで、Zoom という Web 会議サービスのアプリケーションを利用し、オンライン飲み会を開催した。物理的な距離があっても、お互いの予定さえ合わせれば時間や場所を気にすることなく顔を合わせることができる。大学進学を機に会うことが困難となっていた高校時代の友人たちとも会を開いたが、その手軽さと便利さにより、新型コロナウイルスが拡大する前よりも頻繁にコミュニケーションを取るようになった。

さらに、講義レポートやサークルの活動などについて、疑問が湧いたら資料を共有したり画面に映したりしながらすぐに友人に相談することができた。社会人の姉に聞いたところ、姉の会社でもオンラインによる会議が主流となったが、適時適切に情報を交換することができるため、対面で開催するよりも業務がスムーズに進み、意思決定が速やかに行われるようになったという。また、チャット機能を使うことで、会議を進行しながらも直接は聞きにくい事項を質問し、すぐに回答を得ることができるという利点もあるようだ。このように、IT を活用すれば、物理的な距離があっても適時適切なコミュニケーションが可能となり、よりよい成果を生み出すことができる。

また、『『ニューズウィーク』誌によると、モノとヒトの移動が減少したおかげで、大気中の二酸化炭素、窒素化合物が減少して環境の持続性にむしろ希望を与えるものとなった』⁹との意見も示されており、これまではどこか非日常的な手段であった IT は、新型コロナウイルス対策を経て私たちの日常に浸透し、様々な可能性を示しているのである。

IT の利便性等の他に、新型コロナウイルス対策を経験して得た学びとしては、「手洗い・うがい・マスク」という基本的な感染対策の徹底の有用性がある。「外出先から戻ったら手洗い・うがいをする」というのは、当たり前の内容ではあるが、人類が様々な経験をしてきた中で得た予防対策であり、幼い頃から教えられている教訓である。当然、私自身も徹底してきたつもりであったし、他の人々も同様だろう。

しかし、新型コロナウイルスが拡大し始め、明確な感染対策として正しい手洗いと咳エチケットが掲げられた。外出先から戻った時だけではなく、食事の前後や公共のものを触った時もまずは手を洗い、これまでは体調の優れない人が周囲にうつさないために着用していたマスクは、うつされないために全ての人が着用するものとなった。

私もこれまで以上に念入りに取り組み、家族やアルバイト先の知り合いなどとも声を掛け合うようにした。その結果、毎年誰かはインフルエンザや風邪にかかっていたにもかかわらず、家族も周囲の人々もインフルエンザを含めほとんど風邪をひかなかったのだ。全国的に見ても、2020 年～2021 年シーズンにおけるインフルエンザの推計受診者数は約 1.4 万人とされており、前シーズンの約 728.5 万人と比較して大幅に減少している。¹⁰

⁹ 村上陽一郎、前掲書、26 頁。

¹⁰ 厚生労働省「インフルエンザの発生状況」

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekakukansenshou01/houdou.html

予防対策としては例年と同じことをしているはずなのに、このように明らかに異なる結果が出たということ踏まえると、我々は予防対策を行っているようで知らず知らずのうちに疎かになっていたのではないかと考えられる。手洗い・うがい・マスクが予防対策として有用であることは認識していても、自らに密接に関係のある教訓であること、この教訓を軽んじることなく徹底することまで意識している人はどれだけいただろうか。当たり前の予防対策が新型コロナウイルス対策として掲げられたことにより、非常に重要な教訓であったことを思い出させてくれる結果となったのである。

このように一見当たり前で今さら言うまでもないようなことは、これまでの経験から得られた教訓であり、だからこそ我々は継続していかなければならないということ、新型コロナウイルス対策を通して学ぶことができたと言える。

4. おわりに

新型コロナウイルス対策を経験して得た学びを振り返り、次にすべきことは何であろうか。それは、得た学び、教訓を忘れさせない仕組みづくりであると考え。たとえばイタリアでは、スペイン風邪等の「過去の疫病の恐ろしさを、一般教育の段階で習得する機会」を与えることで、「経験はしていなくても想像力は鍛えられる仕組みになっている。」¹¹ また、日本の教育現場でも、「今までやってきたことを否定するのではなくアップデートさせていくという発想で」¹²、すでに ICT の活用に取り組んでいる事例が多くある。

新型コロナウイルスへの対応により得た教訓を生かし、そこから新たな時代を創造することこそ、新型コロナウイルスというパンデミックを経験した我々に求められている重要な課題である。

【参考・引用文献】

- ・池上彰（2020年）「新型コロナウイルスの終息とは、撲滅ではなく共存」SBクリエイティブ株式会社、92頁。
- ・美馬達哉（2020年）「感染症社会—アフターコロナの生政治」人文書院、168頁。
- ・村上陽一郎（2020年）「コロナ後の世界を生きる—私たちの提言」岩波書店、26頁、87頁、205～206頁。
- ・村川雅弘（2020年）「with コロナ時代の新しい学校づくり—危機から学びを生み出す現場の知恵—」ぎょうせい、63頁。
- ・NHK 特設サイト「新型コロナウイルス」

¹¹ 村上陽一郎、前掲書、87頁。

¹² 村川雅弘（2020年）「with コロナ時代の新しい学校づくり—危機から学びを生み出す現場の知恵—」ぎょうせい、63頁。

<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/world-data/>

・データのじかん「1918年に大流行したスペインかぜが世界に与えた影響とは？」

<https://data.wingarc.com/impact-of-spanish-flu-25690>

・厚生労働省「インフルエンザの発生状況」

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou01/houdou.html